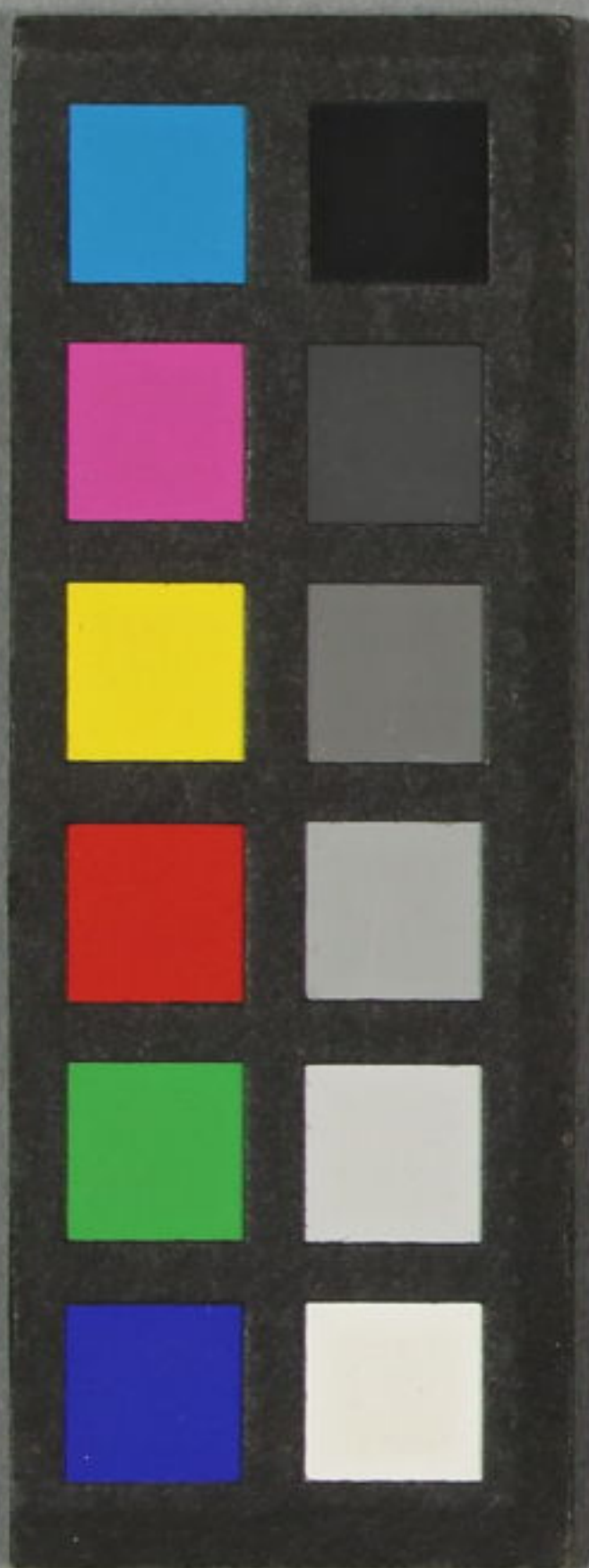




震之部

誹諧鑄

5
1928
3



5
1928
3

螢雪菴

孫^{あつ}方^{なる}主^と

鉢^ち和^わ念^ん仏^{ぶつ}

後^ご佛^{ぶつ}傍^{ぼう}尼^に

名^なる^るき^き地^ち名^な

鹿^か島^{しま}地^ち名^な

神^{かみ}子^こ潮^{うしほ}草^{くさ}

佐^さ原^{はら}牛^{うし}堀^{ほり}

女^め丈^{ぢやう}飛^ひ

子^こ々^々上^{うへ}

神^{かみ}祇^ぎ遠^{とほ}眼^{まなこ}湊^{みなと}

萩原祇報

大神楽麻多の聲ハ若持とて
神和案のけりりも竹の屑
尼ハ心の御ハ折念ふ念仏
奥の社之布七布古味取也て
流波の足つる空しい鳥渡
振て尺る為後必の状ハ大根程
物元と之の物もゆるこら大川
物本て名代の門と速うささ
馬平一ロ 振持 見も
中よれて痛ると糸丸の二平子丸
名掲糸丸取ルルル子丸切る
拍孝子祐のさハ一三紙登川
版赤ハ脊肩て大表ハ中
うらみの廊下の怪高ハ帆之貝

賢公ハ
 海く
 仍之
 去の物
 秋の物
 極 蓮 雪
 露 孝行
 袴 供衣
 針 仕衣
 涉 忌少神
 短 夕多夕
 多 忌而全
 長ク
 て 夏よ

摩訶窗

一 所 又 示 美
 又 下 下 下
 ぬ け ぬ
 中 下 下
 仁 下 下
 老 氣 上 下
 似 下 下
 ヤ 下 下
 下 下 下

夫ハ川ノ想
 赤良佛ノ晒の竿子
 中ノ心ハ君ノ心
 高車ノ供一人
 芭蕉ノ心ハ
 支那ノ酒
 松ノ丹ノ風
 信ノ心ハ
 尾ノ心ハ
 長ノ心ハ
 子ノ心ハ
 傾城ノ心ハ
 五ノ心ハ
 卒ノ心ハ
 病ノ心ハ

林 珪 山

蛇ノ心ハ
 文書ノ心ハ
 赤山ノ心ハ
 冬ノ心ハ
 赤味ノ心ハ
 虫ノ心ハ
 葉ノ心ハ
 葱ノ心ハ
 室ノ心ハ
 糸ノ心ハ
 姑ノ心ハ
 何ノ心ハ
 柳ノ心ハ

何と云ふ
 道々の定
 まりし
 情のり
 姿の匂
 赤あや
 何と云
 情のり
 意味やま
 不と
 ちの心と
 へへり

廿日坊

何と云ふ
 女の情
 姿の匂
 赤あや
 何と云
 情のり
 意味やま
 不と
 ちの心と
 へへり

優は塞り出法は松のあはれ
 近附しけりさくおと川
 日さす母をくるとお家
 子あはれに生のおまを
 傍上と春はあま又とめ
 ちあはれと施米するおの月
 ちうちうとちうちうの初く
 外山の笑ひまはるき不
 猪とり神の中まきす男
 仔の世のおまこゆるんを
 牛の森へある例は棧を
 すしよ平家も松の日の入
 芋根の糸のおまりを素麴を
 ちかちかのおま車はちうきて
 白子伝りの松の涼しき
 薪の焼く笛中よる麻

欄 國香

吉原へ這つる橋もよ本う
 ぬ橋よ新造の突竹の杖
 織とこまつと行とまの
 棧へ引りて嫁のちを相
 婿よ心かつて仲あかき法
 巻よ甘とくちの仲あかき
 ちうちう子の巻よ岸の
 子と夜松をよ二つ初る
 何と云て見てある高の桔
 ま舟の高と後年のは
 雲をくちうよ巻よ
 何れの清れは候まで
 母親ようとくちうの突
 子伝の橋よ妻の物色

Handwritten notes in the top right section, including the characters '廿日社'.

葛菴

山新水辺に
松也とれ存
さあめり
あはれ
とん
よか
昔時
か
と
か

りくくひ積を水と煙塔
医とくり積を引く新造
様の木の折る新なる積所の帆
蝶をく積所流る物の、葉
つくり青々し水柱の高
月夜の間に三服の危
二之軒は去へ積所の高
田標う標とつりハ吉原
人の日のやうに七所のつま
あや深や之流の地のつれ
牡丹うけく葉のくりか
啼と包く帰る牡丹
暮睡とり金屏の地
うのまて葉とく積所の市

藤 李門

ちやうとと林へさる夕陰
積りくく積の積言
怪しい積の絶と解く尼
積りくく積の積言
あや深や之流の地のつれ
牡丹うけく葉のくりか
啼と包く帰る牡丹
暮睡とり金屏の地
うのまて葉とく積所の市

子母

船の勺

責めよ

作

うま

試瓜齋

うまなり

買明志の

うまなり

と

と

新教桂坊

考

買

あま

仍

新

坐末卷

鱈の後戻徳丹 4一葉巻
あり親の羽衣と名せて酒の所
まうい所 4一葉巻 新造
地頭と殊敷く 拜む百姓
五葉巻 4一葉巻 母
か 4一葉巻 4一葉巻 母
あふせよ 4一葉巻 4一葉巻 母
山公事 4一葉巻 4一葉巻 母
ま島やい 4一葉巻 4一葉巻 母
隣 4一葉巻 4一葉巻 母
下舟 4一葉巻 4一葉巻 母
飯の湯 4一葉巻 4一葉巻 母

田路通

案内子ハ小春の蝶子とらた
大きふ 襪 4一葉巻 六月
悟 4一葉巻 4一葉巻 小春
星一 4一葉巻 4一葉巻 小春
清らぬて来て 4一葉巻 4一葉巻 小春
桂木 4一葉巻 4一葉巻 小春
娘 4一葉巻 4一葉巻 小春
菊 4一葉巻 4一葉巻 小春
菜の花の 4一葉巻 4一葉巻 小春
か 4一葉巻 4一葉巻 小春
よ 4一葉巻 4一葉巻 小春
正月 4一葉巻 4一葉巻 小春
あま 4一葉巻 4一葉巻 小春
望人の 4一葉巻 4一葉巻 小春

新編
四

素と子句

おしと毛

あふ

句作と

奇麗な

あふ

風古菴

あふ

思愛不教

名所

花のま

いふも

素麗

句作

あふ

節返の帳と拍する盆をうら
 日本晴の宿士のつめくき
 赤糸のほろよゆるる牧の弱
 清夜一羽のうこく大寺
 不慮の名るく平丸ちき
 日枝の般若のあまきね木
 樟腦の砕あ太くの積
 風千のあふてあふ枯柏
 法多のあふあふあふあふ
 入院の先へ蘭の約巻
 夜無川咽る古次方の斤ゆん
 たくまの素へ入院くち
 探さぬと隣の用みきりきり
 住吉のまきまの埋む油皿
 宿るる宿るる一夜換校
 陣清のまき水のまきのまき

菅 百 轄

萩千かくく馬場の家札
 室を宿中する口和足の
 之ハ、寮まの鞠管千一
 徒のうけ明千一雨の夏
 歩のあふる瓶治り大の中
 まれとあふく素あ白川
 管弦と急あ平あ結きり
 明地と教のあふ七怪
 びくかかつる老の寝とあ
 和あ結を痛ヤつけあ
 万部あああ自ああああ
 吉の年のあああああ
 祿置人、悠坂のレテ
 洗濯ああ、あああああ

分

古化の洞

古話の
文竹

苗竹

引くけさ
ふもわく

かーい
ある

かーい
ある

かーい
ある

かーい
ある

かーい
ある

かーい
ある

かーい
ある

かーい
ある

かーい
ある

かーい
ある

かーい
ある

かーい
ある

故園舎

加藤如空

猪脊石のて脊中ぬくとき朔夜
 空一首よんくうをさる大樹
 まつ雪去らふりし鼎柱てんて
 懺悔をとかさるのよ妻してんて
 痛もまをさるこええとを思て
 泪増を款ふ翁の悴の若藤太刀
 所も様と袖つら古く曾の才
 ゆくくおく嵐の友行ふ生舎
 洞布やまも古知まも晒とある
 碓子遠りくくも古もろくも
 こりんくくと祐信の嘆
 奇樺は相国の眼と斜ある
 枝折せし竹もさていさあふ
 あさやうや急流子鼻とさうして
 棒ねりりふ宿を然もさうりり
 音取もりりてさる眼とある

んきくあまのまのまをり
 新造のあ名の物とかいりり
 家く平屋む宮の内和腔
 十月まて冥加ある審相筆
 桃の葉八葉て伊勢の節系
 節下の隅は十月の地
 行列をんあてて居る大佛
 へるさうとを遠むのうりせ貝
 下瓢とを伝あ本屋の文舎
 燕の通をへま山をう猪
 おの山くはくふ神風
 蓮もえとめる児もさるり
 は湖の風名の松をかさる
 川竹のゆは方家のさる

ア
四

地あは

情とこあら

あつ

あまのあま

古の

あつ

あまのあま

あつ

あまのあま

あつ

あまのあま

あつ

あまのあま

あまのあま

師竹菴

強弱

あつ

あまのあま

あまのあま

あまのあま

あまのあま

富士 関

あまのあま

あまのあま

あまのあま

あまのあま

入相子戸をさる所なる所

力の代と親も屋の世と語り

眠さるる祇王をまもるれてハ

かけ物とと木をさるる任の内

あまのあまのあまのあま

浦人さるる也ハさるるもあつ

あまのあまのあまのあま

あまのあまのあまのあま

あまのあまのあまのあま

あまのあまのあまのあま

あまのあまのあまのあま

あまのあまのあまのあま

あまのあまのあまのあま

あまのあまのあまのあま

あまのあまのあまのあま

あまのあまのあまのあま

越谷吾山

魂棚よわさるる行の利色

血丸もあつる勇りさるる媒

松さるる又の遊人の子を抱く

あまのあまのあまのあま

あまのあまのあまのあま

あまのあまのあまのあま

あまのあまのあまのあま

あまのあまのあまのあま

あまのあまのあまのあま

あまのあまのあまのあま

あまのあまのあまのあま

あまのあまのあまのあま

あまのあまのあまのあま

あまのあまのあまのあま

あまのあまのあまのあま

クハ
四

道は
定まらぬ
まじり
向中へん
まじり
あまら
わらわら
まじり
まじり
まじり

珍重菴

和らま
あまら
まじり
まじり
まじり
まじり
まじり
まじり

六日の梅斗牛着南まじり
舟更のまじりくくと佐田店む
秩原せりまじりと妻のまじり
孫宗と同へんお紙の麻てまじり
ふい日お紙の紙の又ゆまじり
松明へんお紙の約曳まじり
比良へんお紙の極月まじり雨
謝まじりお紙のまじり
石まじりお紙のまじり
蝶のまじりとまじりの人とまじり
まじりの用を初めまじり
屋敷まじりお紙のまじり
まじりとまじりまじり
又山の庫裡を仲居まじり
まじりまじりまじり
まじりまじりまじり

大塚雪齋

琴絃吹ちりる下よかまらそと
茂木の穴まじりちりるまじり
魂柵も木まじりちりるまじり
今ハ麻糸もまじりちりるまじり
まじりちりるまじり
秋の日の猫麻せりてまじり
秩原の止むまじりちりるまじり
駿馬の麻糸のまじりちりるまじり
まじりちりるまじり
牛馬のまじりちりるまじり
一進まじりちりるまじり
市志のまじりちりるまじり
田へまじりちりるまじり
まじりちりるまじり

名所 櫻
 ありて
 ちとてけし
 あり
 一さく
 不あり
 きりて
 けふ世の
 業あり
 者あり
 句あり
 あり

抱井菴

ありて
 ありて
 ありて
 ありて
 ありて
 ありて
 ありて
 ありて
 ありて
 ありて

吉原や彌の隣もちりさくら
 丘塔と考をよきまの柳袋
 坂橋も百日紅のり敷やと
 櫻の中や一坪まの元日
 始礼通るをさう 淀舟
 業あり水のさきとえりや
 海ありと書きこみひの時鳥
 二とハあきさきより神樹焚く
 悔ありと名へハ坊のいびりて
 傘ニがきりて朱雀のまわり
 乃礼のおききりて辨答ありて
 横所よ柳をよめて女醫者
 畑より二なる灰をくが蒲団
 山寺ハ櫻地ちハ毒草ありて
 ま味ありておれやいふて
 子のよのひへ月神とある

武 英 鷗

松志き田のよえりて
 ちりてなるよき橋ありて
 白着よありておれ
 痛さうりて
 軒草蒲末よおれありて
 白鳥の夏ありて
 松よりえりて田植ありて
 後一博うせて
 赤のはさくら
 あさきはちえのひさし
 瑤さハ柳の伏見の雑漕て
 更夜一りて
 かんこる
 眠き屋の一調

分作四

山さくらんこの小唄ハハ唄うく
冥多余女扇を拵せし
迹一と名のあつちのあ
土根のたむきき禪寺
後述の追人のしる奉のま
御の天宮中ぬるき庵下
将衣よいつりつりるの行
世よぬぬ金の二代目とせ

含月居

一
かひく、ま
所之の
松の
松の
松の
松の
松の

衆 灌河

杉及びむを原寺まう桔槔
菜虫さふ生生の地元の藤の上
松うま女の多志の権をこう
志堂老用極よあるも
寺しと名不て糸の張り
去らうと日和尺で味本名の物
山子さくかぶ柳の一系宛
産の産物よある新尾
山鷹宿正月あまより竹
舟よすし生姜の白ふ江元のせ
悔とつとれよ春の蝶を
坂本の橋よ尺遠く秋興
氣と見る内も極よまか
冥多の味下へ御も烟の糸

寄名のうい
うめりー
ふとてり
ゆき一
ゆきうい
考り
考り
考英志の
えいし
がい
あろえ

月尺菴

ゆききりり
系名のう
あーか
長句
てとよ
田舎のう
ふとあ
あー
あ
あ
あ

浅蓬の巻の上へ一蝶涼
馬の脊をうけて居眠るほど信
持るる柳葉の纏の中へ
四竹の蓬足の寺の石灯籠
うつろふやまの地へ
かー花子よさこい
諸君のまゝも持てぬ
茶摘み
の寺の本奥も一
川を渡る氷の上を
まをのせぬ
柳の葉を
しるしめぬ
音

多遅樗雲

縁核いもあつて
しなる葉花
柳の葉も
雲川の一
名を借
夜の家も
宿一人
松はく
しるしめぬ
紅雀と
けむと

ままの
 ちんちん
 こころ
 ままの
 こころ
 ままの
 こころ
 ままの
 こころ

鳳居宇

ままの
 こころ
 ままの
 こころ
 ままの
 こころ
 ままの
 こころ
 ままの
 こころ

外丹の
 斤麻
 二人
 麻烟
 後烟
 望
 梨葡萄
 麦
 湯
 眷
 單
 世

浅井々

編
 井
 野
 糸
 袂
 摘
 山
 待
 八

いんげん

古人の名

牡丹杜若

梅蓮

花の山本の

花より

宮子

いんげん

いんげん

いんげん

蛙蟬宮

いんげん

無樂

いんげん

いんげん

雪牡丹

梅

いんげん

いんげん

新のう

いんげん

いんげん

横より入梅のしるす早雲寺

惟光を石を意を後生

市糸向をくく色く牡丹

糸く梅の倍のひく

梅くさくら平一糸もえま

蓮よりさうりよ児の銅酒

之夫婦ハ中の夫婦者

二十は伊達まら月福

南無のす味方中梅

推ようくく通原の結衣

いんげん馬一口蓮まら

埋本と砂る錦ハ平長坊

牡丹の侍紋うく平蝶

牡丹のすくく地陣のめ

加藤萬磔

まつりりの毒の毒肉子

神の毒中ぬく火とん

咲く毒あろくく伯原山

妖物のくくとまらぬく

ちうくくくくく

忘まる時を毒の一枚

家作り子名おんく

まらあまらく夫春の元日

高年くあつめて本名の初儀

小淫も彼の本けの売

中子の名おんくく東山

大原女の梅をえく

茶のくくくく

解和るくく

名所

東北名

素のつ

た

上方地名の

うら

よ

泊原沼

あ

ま

うら

え

桂窓

強弱あへ

高野の世流す

よ

弘とくを

定す

娘の死追ふ

のまお

母お川の

れ

ゆ

ゆ

あま

家世あまのうら

まのあまのうら

他は山はあまのうら

昔とあまのうら

誰のあまのうら

かあまのうら

あまのうら

大津のあまのうら

あまのうら

除あまのうら

あまのうら

あまのうら

牧 冬英

岸路の遠い

子引のあまのうら

矢をあまのうら

酒製あまのうら

あまのうら

あまのうら

あまのうら

あまのうら

あまのうら

あまのうら

あまのうら

あまのうら

あまの
かみを
くさるる
きりあ
まかり
けり色の
法着
かき
ゆと
あけ

封意

一 巢菴

一 けり
あまの
かみを
くさるる
きりあ
まかり
けり色の
法着
かき
ゆと
あけ

之法と折る替女の死年
木の上へ柳の味ふ小室堂
あつたれ見し一川と一は
抱きけり影をみるさへ
看者病人へ着たのさへ
大車軸ふのあまのわき
菊子のゆきと昔いふさ
枯せにふ下と迷と流るり
あはさるまの上なる山
あはさるたまきんとその
寺古く見は本終の終る
あまを午一川とやうと
と年よ一ふハ花柳も
云はるる一と牙はい
よきく眼口の知く
梅

牧 雨澤

近侍仲居さすは
あまの
かみを
くさるる
きりあ
まかり
けり色の
法着
かき
ゆと
あけ

山田のふと
 下ろし
 白紙
 類志
 中
 新
 一
 一
 一

旬樹菴

珍
 高
 類
 公
 一

昔まゝとて後千倍倍何
 西角 嶺へさる中川の
 号と入せし悔をかへる
 降くうへ人を集る屋
 下は物よまらぬを扱
 年一の事と呵る葉
 巴千一とるるを舞
 物をとらるるを舞
 原も味もよく祝く

牧 五陵

花丹の虫 猪 羊 鹿 鹿
 押入よあると一草一木より
 并々 草 菊 の 瑞 雪
 坊主 売 の ぬい 茶
 けい けい けい 脊 骨
 うを 合 合 合 合
 茶 茶 茶 茶
 二つ 二つ 二つ 二つ
 古 古 古 古

ゆゑに
あつしき
不見せし
きつめ
るま
さきふ
う
う
う

伽羅菴

一所の強き
方なり
山男 山法向
山かせきの人
孫のふつき
そのまは
お合
猫
猫
尼
う
う

幸ひつらと馳ふ契り
野猫の強をばはる舟
上下の紋の四つはれよけと
三方平一切そのの強の諸
癖をえて一日狼のようつと
下知れと振る指る尻尾
今年強は後めとの引はる
條物の星のあすり出あ
ま痛へ中へは居るけ
押誘ふ年を生梅屋の
糸花の中あつて其の編
金印を押し見のありさ
舟のあつるのりよと
海堂の眠るうめき
田の

小栗百萬

出匠の玄冥ありやう
約合を能く強りし
川近くあつる毎尾のぬれ
大石のまをさしと
揚屋のりうと
精進のきりつめさ
下馬の秋鹿の草も
之を目のあつち
田松程十を交のち
方夫へ法法の
おおとろへ
本の洞は
棧子の

句中のそと
 せとある句
 本とす
 大まき
 句はあ
 泥坊 生 碎
 うと
 依
 あり

木樨菴

和ら
 亦
 杉田の
 禊
 鼻の峰
 桐大金
 故事 地名
 世平の句

杉田ハ日本のうら
 越路の
 出
 狐
 大
 西山
 腋
 放
 母
 白
 関
 の

谷口樓川

鹿
 夕
 母
 本
 折
 杉
 葱
 か
 夫
 妹

世平の句

世平

奇麗篇

仕まへ

よき句候也

よ

初巻

新巻の句

必る上

あま

むつり

こころと

あま

あま

木神巻

獅子眠

船き句なり

船常衣傷の

句ふゆ物なり

舟

船怖た近

舟所

舟の巻

愛憎

舟よ

の巻

舟

舟

船火をくちくちく耳かきしりしり

桶くくまてしりしりと巨砲へ水菜の

ぬのりよ衣刺へ是をる西急小神

を紗袋と裁るハ娘の赤子抱

目一市園よあ方かん 親

あし女の一人持ちと塔をさる

光陰と核の影み折つあ

幼半の子猫と世ふ西行忌

智の夏うくあうと神相

仕鳥ひ大ユかんぞ吹竹を

口つりりの子抱えりよはは糸

旅の癩まら本夏子あふ

涌まら神平一えたりき文

あまといおまぬら方の姿かり

今果ま人も行るむち力持ひ

今い昔あの方老も 刀 府

谷口鶏口

又まらとく麻きハ記念の仲し

は舟よ足ふハさきあま生ふ!

峰をまらとく平一とよりあま!

曇き髪ハ嵐の年々冬の恨

蚤の懐さる一戒ゆる後

舟き夜かきと記念届けし

こころの大神村中而ま

水子鳴きと新又破きと麻衣

絆まら新セハ嵐を踏りぬ

白をまらおの核の舌ははく

風の吹くとまを指す枯柏

食のまらまらるぬの信侶所

生望まらまらるぬの信侶所

流々まらまらるぬの信侶所

後藤坊

大住

不さう
中書

うく 交女の

相半の馴ユ

白と傍ア

惟光

感懐の句他

よし

ふかふか

ソウキ

歌口島のそ味

くく 大く

返り

夜月菴

強弱あふ

是もとよ

んく古

又へと

意の句

書きま

あま

揚をま

あま

ゆり

う

京強

四

清きく清きくひそく生ま
 云病の帳ハ七布の産色く
 似と目もくうたたの巻結
 娘涙のう子幼と教あろう
 通夜明く連之れ流の唱馬
 黄きく岩く水とくく
 望み鳴く也も待おの地きうて
 押粘の口海ふとくうをこよ
 沼石は紅緒とまうて物き
 首民山前くうの初ぬや
 取持ましく清きとくく
 望みく身なき娘涙の光陰
 雲上のく云えくさぬ半字の倍
 麻笛子伝保うり枝と飯かへ
 切火折尼他くく夜ハ明く
 田舎子一話の傳る者人

水野五弦

尋常が神髓の書ゆる三井の杖
 繪巻の福を讀くやる院
 肌の子も梓す麻の妻のう
 喰切く試つける年のせ
 一かこまりり年一の書廊
 季のうより存きく新まらり
 相年一よりても秋のまよけと
 歌舟の伴習子かりくく七島の書
 帰も故もあしと一葉まら経凡
 控られぬ麻う谷も私まら切也
 万葉も揚巻也合ふ内人数
 合をくく一書良り別月
 強飯の身一を麻う麻持
 ま中子たみき旅勝花舟

四

松田金屋

之治

細比地

徳垣

河内垣

何より

玉村

前は血不土浦

八幡

あま

長良川

石知川

近ひ

あま

虎

あま

あま

あま

自在菴

強弱

能

面

温泉

基

之

其

あ

寺

松

味

尼

遊

行

尼

温泉の噴き出る所又近ひく
峯ありて報ふ家戸のた著
ある花と赤くく多き茄子
十之夜ひく片はへ祖師
堂の塔の着て敷く鳥居
猪沼の寺ハ葡萄の架金
今も然る考ましくと信
穂妻の切火二はるく
神近きましくまをま
旅の古きましくまを
まをましくまをま
二三日耳ハ仲津の波の
一着ハ着て六浦の仲

仲 祇徳

外長ハかゆくやまをま
うれり、まを二ん位
忠ハまの二まをま
之海を知らずまをま
年知く、情き木汁の忘
日達ハ、尼ハ、細工
字、今佛持まをま
抱とまをまをまをま
まをまへ、まをまをま
まをまのまをまをま
まをまをまをまをま
持佛ハ、まをまをま
光を杖ハ、まをまをま

山崎

院阿
平家
軍
一雙
新
平家
軍
一雙
新
平家
軍
一雙
新

深月菴

強弱
雲上
軍
馬
都
新都
復
平家
軍
一雙
新
平家
軍
一雙
新

くくをさき娘塔をうそ
徳作と先毛之井の通帳
あつては後々も奥子位に
揚をの佛間母の寐所
梅丘の平揚をさかきつる
田と松又所の女宮如へ
る尾もも可毛ももるを
清られてるれへ所さ松色
赤塚の体4一尼の清水
銀閣寺二交のまもる所
は赤くは赤色くぬるなり
火赤く切る中を元日
お干まつるは娘の宮め
何は信を信娘塔の辨
用をまもる馬のぬけ歯包ませ
山崎今の小僧はあつ

三上祇丞

あの中じうち鬼二ある宿
侍徳のあ中の娘と唄
仕下まつる時のく人の保え
飛伝る舟の舞と寺の景
庭くらむ庭やあまの大原
狐狸の穴へも誘揚る
酔醒の裸く揺る柄杓の柄
栞色く系と夜まつ
葵歌のあまのめ
牡丹切るも尼の称名
人しりもるも文七母
後田八日のなても虹の一
利る信を世もある時名ハ佛
信負と子のまもる神軍

植物
 名所
 堂上
 白紙
 濁く
 へん

光風園

一
 地
 かけ
 勺
 子
 属
 名
 名

茶の師へち子葉俄に去りて
 畑を圃をくらむに 浮雲
 津代もまつりて草のまき狩
 抱かちるるる 妬と笑をせく
 下山の児を 続よりり
 りのくるとりまを食のたを
 多理よめつまきと引物
 井日ならしき石橋の出来
 おまきまのあまぬ地の高
 傍正のあきれまひり板草
 為し嵐泥を咲ても草
 先陣も坊主なりり官軍
 を表の坪に圃の云送り
 肝のたるとる仲ぶり馬
 あさく接の奥に任む尼
 綱を巻のたまる新都の橋月

六入 寛美

系まう 妙子家の針 水の味
 りくくとうらむいりる 黒木賣
 親よまらふもみゆ 旭
 一帳つ 庭へたむ 石ほ
 せ火の 橋の 雲の 奥
 作えうら 白きまの 田井
 不二の 日よまの 由井
 りの 貝の 橋の 蔵王堂
 法橋 拾まの 海
 葉より 留糸より 山
 叱らぬ ぬあまの 建長寺
 巻所 知の 久
 信の 舟の 新
 関の 舟の かき

糸子あくる
 今知の春
 今朝の秋
 寒念佛
 一蝶、画の
 帆 桐一葉
 落葉夕日
 夕日
 夕日

凡夫菴

強き方なり
 附向うと
 考ふつと
 思ふあき句
 いうもるへき
 あり
 不傷の句
 つと入若虎
 踊 首鏡
 娘 羞入
 雷 きくさき

羨しんといふ日よかきう木製の雨
 うし 羨るるも不二と極楽
 尻と定規よ田を極る
 算こつし毛見中道
 浮舟漕く内陸の海く
 松、星よあ仕立の夜
 髪結つてさうり先のあ結え
 仲人口の村居しと
 岸のふい火を菴の答
 いそその名をえり下を
 左辻の乞の忍辱ハ徳
 僧ひとり机をちしよ
 死くよ遊ふ九軒の
 五十四郎馬の脊よ
 新塔ハ世帯きと
 浦子ハ恨らぬ

大葦原可因

凡居の通くち熱嫁
 大盃をらり筒を待つ
 稚の孝子祝あハ和尚
 ち月の角力よわ子
 腕りち知れしと
 今夕の夜あ
 吾びしあ
 本情
 空の
 とき
 ちやう
 金振
 糸の
 朽木

つゆ
うねり
のほろり
うよ
てとあ
た事
ま

樂成菴

一竹
買明
の
の
の
の
の
の
の

猪車のまめきりぬる類ふり
あやうの程とく文をなす
書者ともかくて初稿み入上り
稿ちの借りる僕り月類
右掌抱り福あし押す
はまら繁をたをる田中取
常りく舟とんと有楽うさき
夜ぬいすの路も物り
院の種もあをとき風をみ
岩ぬきさ比の涼の道気来り
仇訪糸屋ある肉を二を造り
清くせる芽の臨ハ枯の門飾
いりたる物事残も枯の音
生酔ふ丸房やうぬえりり
風よ寺院の栴檀底りぬる
桑表の栴檀なる料の上

藤中温克

飛ぶやうおまのまゆの火
大名の門も子控る藪や
町毎の中や喜く見ゆる
毎紙と茶屋をたふんこた
池川・つへり長つり
四十七膳 尻り 籠 棚
雪道ひきくも四糸の量の人
裁よりけと糸細と男の子
ふりくの被ひきおまの
本後のさくらよかろと京中
神解の丸とこり山さくら
日和り合ふ玉抽の片意地
高と苦りさる雲水の母
静き心の不きけんがぬあき

伯原 栲
 子くふり
 水辺蓮尾
 母傾塚先
 君老の句
 人共同う
 解
 考一了
 一

石壽觀

自らの名
 極功買咄と
 のらあは仕
 一
 座か 弁天
 江の流 笠島
 仲居 郭
 淀 伏見
 本所の地名

田松の中り二人まき 姥
 被さる由き伯原の朝陽
 母つまらぬ松のあまふ生の猿
 盲馬を養ふ松くくは
 作印く本の石の松よけを
 市の桶さききりぬる鴨のね
 ち佐助もくへく伊とあう鹿も云
 蓮枯くはぬ松のまきぬ舟
 傾塚のまきり松と比田深
 虫松よりくもあしの二ふつき
 同と松とやと田松のり
 松おまの上まきてまき
 まかかくて原松の御のまき
 初ら伯原まきり松のまき
 三伏の峠まきり松のまき
 万葉まきり松のまき

壽 秀國

江戸の松まきり松のまき
 菊作まきり松のまき
 舟和歩柱のまきり松のまき
 くまの早きまきり松のまき
 隅田の松まきり松のまき
 柚の花ハ八重の松まきり松のまき
 舟自舟の松まきり松のまき
 堀へまきり松のまきり松のまき
 堀のまきり松のまきり松のまき
 松のまきり松のまきり松のまき
 新造の松まきり松のまき
 堀へまきり松のまきり松のまき
 二馬かて松まきり松のまき

松島

奥の地名

まへくろき

まがしめり

雪菊梅

寒舎佛

月の匂

よろり

世話

堀舟箱

買込

お造の匂

よか

新樹菴

かりり

かきり

東地名

まより

まか

張心か

あつち

あつち

あつち

あつち

あつち

舟川の船屋つめよきと舟の枝
 又ひとり寝相見ゆるるるる
 梅はよ四ノかくけむさるの
 今ふまきまきくちくちく
 菊咲くあはれの画巻きるる
 菊作竹と一帯よまきのきり
 傘よあのをきすすまきの
 極楽寺五山の先へ松々きり
 物家の松開子女の二ふつと
 是えへ冷と紅のまきり
 子と赤揚る勝越の渡
 ほくまきねお舟のぬきよ
 暮帰るるるる正月も二日
 名号よかくと松戸の舟舟
 ハ軒屋まきりあのはと
 物まきりあかり船の毛も

花隈多少

春はよまきり
 金後川神あぬ神も持
 煉掃も館とまきり
 角も荒れぬまきの
 子の子まきり
 力まきり
 秋とまきり
 世は風まきり
 院とまきり
 尾花まきり

子の句
よし
舟うととく
あゆみ
ふく
細代 細代さ
水辺の白
花地との
さく
さく
さく
さく
さく
さく

雨夜菴

強弱
舟梅娘
医者 尊
雨舎
こ入
雛田
野的
上地の
吉祥
源隆
大師

星をみて又病まはるる細代と
了昇のやうに病てあるもあは
舟娘の後にさかしく海苔賣る
菊のちち菴よりさるる月掛
涼川 盃をさしし 星をみて
毎一、まこと今年もさし
さ田くさるるそのの 舟 白
ゆらぐてあつるるまはるる
小尾花をさるるあつるる揚をさ
能風の来るるあつるるあつるる
院のあつるるあつるるあつるる
按日さるるあつるるあつるる
旅をさるるあつるるあつるる
ま荒くさるるあつるるあつるる
あつるるあつるるあつるるあつるる
夕月あつるるあつるるあつるる

峽田菊堂

菟帳へ許るる六浦の姿に
さい形さるるあつるるあつるる
松坂くさるるあつるるあつるる
あつるるあつるるあつるるあつるる
さのあつるるあつるるあつるる
片のあつるるあつるるあつるる
下河のあつるるあつるるあつるる
清さるるあつるるあつるるあつるる
舟の上のあつるるあつるるあつるる
田のあつるるあつるるあつるるあつるる
伯家のあつるるあつるるあつるるあつるる
人のあつるるあつるるあつるるあつるる
あつるるあつるるあつるるあつるる
上下さるるあつるるあつるるあつるる

白くよ

新の白七

あま

あま

あま

あま

あま

あま

あま

あま

あま

太平菴

ゆき方

島

蛇

蛇

今

今

今

今

今

今

大町連馬

梓麻の木のちりきりきりきり
 ちりきりきりきりきりきり
 替女流石座の西面のついで
 子とを麻せつけきりきりきり
 岸のちりきりきりきり
 左近のさくらきりきりきり
 しつぎきりきりきりきり
 年よかりきりきりきりきり
 け年のまよりきりきりきり
 色にのる造師ゆきりきり
 松竹のあまきりきりきり
 茅ののちりきりきりきり
 春のちりきりきりきりきり
 蛇まきりきりきりきりきり
 柳まきりきりきりきりきり
 ニ之所ハ坂の境と流土ま

夜とこりきりきりきりきり
 清きけりきりきりきりきり
 二十の肉を画にかく小きり
 忍びきりきりきりきりきり
 毒のちりきりきりきりきり
 小のちりきりきりきりきり
 船のちりきりきりきりきり
 灯明のちりきりきりきり
 何れもあまきりきりきり
 くのちりきりきりきりきり
 草まきりきりきりきりきり
 何れもあまきりきりきり
 何れもあまきりきりきり
 何れもあまきりきりきり

馬 浮世堂

被

詠口長

田女長

のま味

らみ ちり

太平養

丙辰夫

強弱まよ

あう

句作ハ

んいき

う修うう

名所或ハ

松也まア

寂しき神の

まよ

巻時

あうれハ

面ぬい子と笑ハせる生生の指
け所の返家と笑へる鞠柳う
面舎うらうくと笑てハ指をる
一船子流のあすまいつくし島
所化原子飛ゆくせる三井の秋
寺の併よ美まらる橋多我寺
およすけらお居のまい云早う
年とち産よ成る 大い
あの子所さいきこあき霜並逆
子の股さ上下あむ腹の中
之位の一も現まう今ううく
判カも飛とあうけとたえく
着入の蛇み出いりか茶境
る蛇蛇のあま法あの香煙く
波柳く油一枯伊蛇はあ
まあう雲へ雲つくも定寺

木村金洞

池上とやあう似定の念う
生男と双へる江戸の浮世堂
あうれと御習あうと遊便
為武者の海いあううわ柳
あまひとらうれくまの蛇池
出入ちうまう秋もくまの蛇池
あうれとあうと医者の笑ひ声
馬傍子と裂とあうさけ髪
寺のううまうる方へ飛とむけ
たき梅の本の白あ神の具
指く排あみちとせー 陰下
出休の云をくする代々を屋
縁締のゆきあううう約一切
定紋の牡丹とあうるああ老

吉原 売

買りあふ

極あ

或ハ新やと

新やと

と物ありと

細休さ 湯也

角力九 乞食

舟指を今迄

六月迄牡丹

売地者も

よー

派分さるゝの例も常會に
 本屏の香も忘るゝは次廣石
 翁境ハうゝ一嶽一き新橋
 清多を売りまゝに御座んぞと
 山橋々の小唄ハ清信うゝ
 夕魚の花ハ坂もまよふれり
 仙画所のうゝ所ハ高き山橋
 味方平一ゆゝと強ハ傾城
 浅草の待立橋ハ棹うゝて
 井筒うゝる流のまゝ人られい
 志の申す平一兼ハ、毫ある大流
 安んよ妹うりゆけハ初ま矣
 安んよ妹をぬけハ城の果て
 浅草のうゝまゝこゝハ流舟の
 長ハまゝ流すゆゝ、更衣
 九世の橋の上平一不二百

